

口 中 科 の 歯 冠 修 復 術

山 田 平 太*

填 塞

口内科療治で齲窩をふさぐようになったのは、江戸後期のように、その以前の口中書には見当らない。蝕歯の穴埋めは、穴に物が溜り口臭の発するのを防ぐことと、歯痛発生の予防にもなり、従来よりも一段の進歩を示した。填塞物は

1. 山椒、胡椒、巴豆、石膏
細末とし糊で丸める
2. 丁子、明礬、蟾蜍巢（灰）、漆
3. 鹿角黒焼
4. 丁子、茱子、胆礬
末して漆で丸める
5. 山椒、乳香
6. 丁香、胆礬、胡椒
7. 巴豆、丁子
8. 丁子、明礬、蛤貝（焼）
9. 紫祖、丁子、熊胆
以上粉にして丸める
10. 乙切草、郭公
黒焼して糊で丸める
11. 麝香3分、台龍骨1錢、唐土1両、唐蠟
銅鍋に唐蠟を先に入れ炭火で溶かした
後、右の薬を入れてよく練合する
12. 辰砂3分、龍腦2分、唐土1両、丁子2分
（3分）、唐蠟2両
以上練合して埋める

齲齒で齲窩に一致した形を作り合着する。合着材は漆、真鍮粉、鳥羽黒焼、松脂を胡麻油でやや硬く練り両方につけ合わせ、焼金で焼く。

かように歯科技術のインレー作業と同じことを考案した。

つぎ歯

○色本で有名な井原西鶴は、一面、封建制下の大阪町人の生活ぶりを写實的に描いて知られている。その1書「今様二十四孝」（宝永6年、1709）中の1節

近き頃新町を見事に身請なされし茨木屋の太夫様の口中の病、知らぬ人もありけれど、奥歯かくし針にてつなぎし事、粹と云男共は皆のみこんだ事なり

文中の「かくし針」は継続歯の合釘を指したものと解する。これは宝永年間に木冠の継続歯が作られたことを実証する史料になる。江戸麴町に住した入歯師横山伝蔵は、同末期に木歯冠と木合釘を1塊としたつぎ歯を作ったと伝わる。その維持には合釘に綿をまいて押し込み、木と綿とが唾液で膨脹するのを利用したと考える。

徳川綱吉時代は、続いた泰平に世は経済成長で、多くの新興商人が出、武士の権威が落ち、文化は町人の手に移っていった。その時代に浪華生れの西鶴は浪華に住し、本名は平山藤五、俳諧師で作家、天和2年（1682）作の好色一代男をはじめ浮世草紙で知られ、元禄6年（1693）歿。

木 冠

昭和25年（1950）に、当時の岡山市郊外の大野辻の田から偶然掘り出された棺内から、下顎大臼歯木冠1個が出た。この木冠は1個のつげ材で、咬合面を歯冠概形に彫り、側面はうすく滑沢にし内面は削去されて洞をつくる。棺内の人物は宗教でいう入滅を実施した、というのは、棺上部に3個の空気孔があり、棺内に書かれた墨跡から、深く禪定に入り十方仏を見ると読めるからである。

生存のまま仏になるという入定は伝説として伝えられてきたが、本久寺住職日勢は岡山県津山市から1里ほどの南の古墳で入定し、実施されていたことが裏付けられている。

棺内人物は岡山県御津郡御津町の妙覚寺住職日学と推定している。その根拠は日学は日蓮宗不受不施派の僧、弾圧されて苦難をつづけ、天保3年1832) 拘留所から信者によって奪還されてから消息は不明、その頃入定したといえる。日学は死の抗議したのであろう。かように仮定すると、この木冠は文政天保頃に入歯師が作ったのであろう。

不受不施派というのは、法華信者でない者からは供物を受けない、法華僧以外には財物を施さないことを信条とした。

これを言い出したのは京都妙覚寺住職日奥で、文禄4年(1595)豊臣秀吉が方広寺大仏殿の落慶

供養に千僧供養を行なうので、法華宗に百僧出仕を請うたとき、宗旨から日奥はそれを拒絶した。徳川家康はその態度をにくみ、日奥を対馬に流罪し、慶長17年(1612)帰洛を許した。その後は不受不施派への圧迫は強まり、死罪、入牢、流罪、追放で多くの犠牲者を出し、僧、信徒は地下に潜行して信仰し、備前、房総はその中心地であった。

以上の修復術は、歯科医術のそれと構想を同じくし、その材料は違っていても、わが国で創案されていたことは誇りうることである。